

第34回 宝塚混声合唱団音楽会

REQUIEM

モーツァルト

「レクイエム」

「雀のミサ」

2024年7月15日[月・祝日] 開場 13:15 開演 14:00

東りいたみホール(伊丹市立文化会館)

◆後援:宝塚市・宝塚市文化財団・宝塚合唱連盟・兵庫県合唱連盟 ◆兵庫県芸術文化活動機会促進事業

ごあいさつ

第34回 宝塚混声合唱団 音楽会によくそお越しくございました。

昨年、「天地創造」のプレトークで指揮者・畑儀文氏は、国連事務総長の、地球“温暖化”ではなくて、“沸騰化”、の言葉を引いて、産業革命以来のヒトと地球との関わりへの危機感を示されました。ハイドンの描く創造された天地への、畏敬への呼びかけでもありました。

さて、火星にヒトが棲めるかの話題で、私たちは“生息可能性”（ハビタビリティ）という言葉を見聞してきました。

昨今、地球の“ハビタビリティ”を問う言説が、惑星科学者や歴史家などから出されているようです。SDGsの、“持続可能性”（サステナビリティ）ではなくて、“生息可能性”の視点からより厳しく環境を考えようという警鐘です。ヒトは、惑星地球からみれば、遅れてきた「他者」、一構成員に過ぎないことをよく弁え、生息可能条件を破壊しないようにというメッセージです。

コロナに続き各地で止まぬ戦争。2024年は能登の地震で明けました。能登には2011年から停止の志賀原発があります。停止と言えば、ドイツではすべての原発が2023年に停止しました。2011年のフクシマに学んだドイツ。地震国の私たちはフクシマに何を学んだのか考え込んでしまいます。将来も青い地球であってほしいものです。

さて今年、モーツァルトの「レクイエム」です。日本で呼ばれることのある、『鎮魂曲』は教理的には誤り。理由は、死者に対する罪を軽くしてくれるように神に祈るもので、死者の魂を鎮めるものではないから（高橋正平氏）、とのことです。教理はそれとしまして、死者安かれの気持ちは現在の地球を見るとき、今こそ必要な祈りのように感じられます。最後のオペラ「魔笛」を完成させた1791年、体調厳しい中、依頼を受けて「レクイエム」に取り組むも未完。全曲の初演は没後2年の1793年。ザルツブルクを離れ教会から少し距離をおいたウィーン時代のモーツァルトは市民派と呼べるでしょうか。「フィガロの結婚」で貴族に抗し、「魔笛」で自由・平等もうたった彼は、ウィーンから、死の2年前に起こったフランス革命に何を見たでしょうか。

モーツァルトの不思議な魔力潜むこの作品、畑マジックに導かれ一年間取り組んだ宝塚混声の「レクイエム」。40年前の草創期以来です。昨年の「天地創造」の後で、何と30名の新しい仲間が集いました。魔力と、10年間のマジックのおかげであります。本日は100名に迫る団員が、名ソリストとアンサンブル・ムジカ・アニマの共演をたすけに、精いっぱい歌います。「雀のミサ」軽妙な味わいを表現できるでしょうか？

私たちは音楽できる幸運への感謝を忘れず、手間ひまのかかる合唱を続けたいと考えています。本日はご来場ありがとうございます。

2024年7月 宝塚混声合唱団
理事長 白神 理平



第33回 宝塚混声合唱団音楽会 ハイデン「天地創造」 2023年7月29日 豊中市立文化芸術センター

プログラム

指揮者 畑 儀文 によるプレトーク

モーツァルト

「雀のミサ」

—— 休憩 ——

モーツァルト

「レクイエム」

指揮 畑 儀文
ソプラノ 松原 みなみ
アルト 福嶋 あかね
テノール 松原 友
バス 篠部 信宏
オーケストラ アンサンブル・ムジカ・アニマ

「レクイエム」

字幕 藤野明子

字幕システム 合同会社ミチヤシステムズ

「雀のミサ」ほか

(出典：Wikipedia、三ヶ尻正 編集：宝塚混声合唱団)

曲目紹介

モーツァルト

ミサ・ブレヴィス ハ長調「雀のミサ」 K.220

- 第1曲 キリエ
- 第2曲 グローリア
- 第3曲 クレド
- 第4曲 サンクトゥス
- 第5曲 ベネディクトゥス
- 第6曲 アニウス・デイ

モーツァルト

レクイエム ニ短調 K.626

イントロイトゥス [入祭唱]

第1曲 レクイエム・エテルナム [永遠の安息を]

第2曲 キリエ [憐れみの賛歌]

セクエンツィア [続唱]

第3曲 ディエス・イレ [怒りの日]

第4曲 トゥーバ・ミルム [不思議なラッパの音]

第5曲 レックス・トレメンデ [みいつの大王]

第6曲 レコルダーレ [慈悲深きイエス]

第7曲 コンフターティス [判決を受けたのろわれた者は]

第8曲 ラクリモーサ [涙の日]

オッフエルトリウム [奉献文]

第9曲 ドミネ・イエス [主イエス]

第10曲 オスティアス [賛美のいけにえ]

サンクトゥス [聖なるかな]

第11曲 サンクトゥス

第12曲 ベネディクトゥス [祝福された者]

アニウス・デイ [神の小羊]

第13曲 アニウス・デイ

コムニオ [聖体拝領唱]

第14曲 ルックス・エテルナ [永遠の光]

解説 モーツァルト 「雀のミサ」、「レクイエム」



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトはロココ時代と呼ばれる18世紀後半にオーストリアのザルツブルクとウィーンを拠点に人生の三分の一近くを旅の日に過ごし、35年間の生涯に600余曲の飛翔・疾走する作品を残した不世出の天才音楽家です。

モーツァルトの生涯

モーツァルトは1756年1月、宮廷都市ザルツブルクに生まれました。父レオポルトは大司教に仕える優秀な宮廷音楽家で、姉ナンネルと共に厳しい音楽教育を受けて育ち、6歳の頃から父に伴われ各地を演奏旅行して聴く人々を驚かせました。1762年にウィーンにでかけてシェーンブルン宮殿で女帝マリア・テレジアの御前で演奏し、63年にはパリを訪問。65年にはロンドンでクリスチャン・バッハの教えを受け、ピアノソナタや交響曲の作曲を開始しました。66年にアムステルダム滞在后、パリ、ジュネーブを経由してザルツブルクに帰郷します。67～68年にはウィーンに滞在し、69年にはイタリアへ出かけて、ミラノ、ローマ、ヴェネツィアに逗留して各地で称賛を受け、71年に帰郷して宮廷に仕えます。73年に再度ウィーンに赴いてハイドンの知遇を得ました。77年には就職活動を兼ねてマンハイム、パリ、ミュンヘンへ演奏旅行に出ましたが、就職は不首尾に終わりました。マンハイムでは従妹のアロイジア・ウェーバーと恋に陥りましたが、父の反対で遠ざけられ、78年には母と2人で旅に出ましたが、7月に母はパリで客死します。

1781年(25歳)、モーツァルトは大司教のコロレドと決裂し、父とも離別してウィーンでフリーの音楽家として定住を決意します。82年にはアロイジアの妹でウィーン在住の歌手コンスタンツェ・ウェーバーと父の了解を得ずに結婚し、生活のために新曲を作曲し演奏会を頻繁に開催します。84年に友愛団体“フリーメイソン”に入会し、85年には自宅にハイドンを招いて弦楽4重奏曲全6曲を演奏し献呈しております。86年にはオペラ「フィガロの結婚」をブルク劇場で上演。87年にはプラハでオペラ「ドン・ジョヴァンニ」を上演しますが、5月に父が死去します。この年、皇帝ヨーゼフ2世よりグルックの後任として<宮廷作曲家>に任命されますが、給金は僅少で収入・力ともに最高の<宮廷楽長>にはモ

ーツァルトの競争相手であるサリエリが任じられました。88年には3大交響曲(第39番、40番、41番)など重要な作品を集中的に作曲しますが、89年には妻の病気や子女の生誕と死亡が重なって家計が悪化し、知人たちへの借金申し込みが頻繁となります。

モーツァルト最後の年である1791年の5月には聖シュテファン大聖堂の副楽長に任命され、歌曲「春への憧れ」、ピアノ協奏曲第27番、クラリネット協奏曲など深みのある傑作を作曲し、9月にはオペラ「魔笛」を自らの指揮で上演。「レクイエム」の作曲を依頼されますが、11月に病床に就き、12月5日に死去しました。享年は35歳で、死因は腎臓疾患とされており、葬儀は聖シュテファン大聖堂で行われ、パトロンであったヴァン・スヴィーテンが司りました。1789年に始まったフランス革命が進行中の時期でした。

演奏曲解説

モーツァルトの全作品の中で宗教曲の割合は1割に及ぶと言われ、その大半がザルツブルク在住の少年期、青年期に集中していて、ウィーンに移り住んでからの作曲は3曲しか存在しません。全曲のうちミサ曲は18曲で、ほかの宗教曲は圧倒的に小曲が多いのですが、最晩年の「アヴェ・ヴェルム・コルプス」のように天上的な美しさを湛えた珠玉の傑作もあります。今日は青年時代にザルツブルクで作曲されたミサ・ブレヴィス「雀のミサ」と最晩年の遺作ミサ・ソレムニス「レクイエム」と対蹠的な2曲を演奏いたします。

ミサ・ブレヴィス 八長調「雀のミサ」 K.220

このミサは1775年、モーツァルトが19歳のときザルツブルクで大司教コロレドの命令によって書かれたミサ・ブレヴィスの第一作と推定されます。曲は1. キリエ、2. グローリア、3. クレド、4. サンクトゥス、5. ベネディクトゥス、6. アニュス・デイの6曲より成り立っています。当時のミサ曲の伝統的技法であるフーガはほとんど用いられず、ホモフォニックな旋律からできておりますが、青年モーツァルトらしい簡潔な形式と祝祭的な効果が統合された親しみやすい曲です。編成は4部合唱、独

唱4部、オーケストラで、各楽章は極めて短く、サンクトゥスは演奏時間が1分弱です。なお、この曲の“雀のミサ”という通称はサンクトゥスのヴァイオリン伴奏が雀のさえずりを連想させることに由来しています。演奏時間は約20分です。

レクイエム 二短調 K.626

1791年12月、モーツァルトの死により“白鳥の歌”として残された「死者のためのレクイエム」。7月にオペラ「魔笛」の作曲がほぼ目途のついたところへ、某伯爵から匿名希望の使者が灰色の服を着てやってきて、亡妻の追悼のためのミサ曲の作曲を依頼されました。この頃既に健康を害し、死期の自覚があったモーツァルトは直ちに着手し、自身への鎮魂曲を書くような気持ちで作曲を進めましたが、8曲目のラクリモーサの途中で筆を折り、残りの部分は弟子のジュスマイヤー（1766～1803）が補筆して完成させました。編成は4部合唱、独唱4部、オーケストラで全14曲から成っており、演奏時間は約1時間です。

第1曲 レクイエム・エテルナム

バセットホルンとファゴットと弦の優美な序奏に始まり、合唱でバスから高音へと主題レクイエム・エテルナムが提示され、ソプラノ独唱が中間部を歌い、合唱4部がエグザウディを歌って対位的な終結となります。

第2曲 キリエ

前曲から連結して、キリエ・エレイソンと対主題のクリステ・エレイソンによる二重フーガが合唱で展開されず。

第3曲 ディエス・イレ

最後の審判を表す激しい怒りが合唱4部で一気に噴き出すように力強く歌われます。

第4曲 トゥーバ・ミルム

精妙なトロンボーンの影響に誘われてバス独唱が歌い出し、テノール、アルト、ソプラノと転調しつつ独唱が順に歌い継ぎます。

第5曲 レックス・トレメンデ

合唱がレックスと力強く歌いかけ、サルヴァ・メと静かな祈りとなって終わる短い曲です。

第6曲 レコルダレ

独唱（四重唱）が精妙な室内楽的な響きによる雰囲気の中で慈悲深いイエスへの訴えかけを行います。

第7曲 コンフターティス

オーケストラの荒々しい伴奏で罰せられる者の苦しみを男声合唱が歌うと、弦のユニゾンに支えられ祝福される者への祈りを女声合唱が対比的に歌い、両者の交

替が続くうちに4声が合体して静かな唱和に至ります。

第8曲 ラクリモーサ

ため息のような伴奏に乗って悲痛な歌で始まるこの曲は「レクイエム」全曲中の絶唱というべき美しさを湛えた合唱曲で、8小節目のユディカンドゥス・オモレウスでモーツァルトの筆は途切れ、あとは弟子のジュスマイヤーによって書き継がれます。

第9曲 ドミネ・イエス

合唱がドミネ・イエズ・クリステとホモフォニーで呼びかけて始まり、死者の救いをイエスに呼びかける讃歌で、クワム・オリム・アブラエ・プロミズィスティ（主が嘗てアブラハムに約束したように）と繰り返すフーガで展開されます。

第10曲 オスティアス

前曲のフーガのあとこの曲はホモフォニーで始まり安らかな合唱として展開され、後半は再び前曲の“クワム・オリム・アブラエ”が反復されます。

第11曲 サンクトゥス

主の栄光を讃える高らかな合唱に始まり、後半のオザンナからアレグロに転じフーガとなります。

第12曲 ベネディクトゥス

ヴァイオリンに先導されてアルト独唱、続いてソプラノ独唱が主を祝して歌い、これにテノール、バスが加わって独唱4部が歌い継いだあと合唱が前曲のオザンナを反復します。

第13曲 アニュス・デイ

低音の打拍と弦の伴奏により合唱が死者の安息を整然と歌い、一瞬の休止を置いて最終曲に繋がります。

第14曲 ルックス・エテルナ

ソプラノ独唱に始まり合唱がコンムニオ（聖体拝領唱）の歌詞を冒頭曲レクイエムと第2曲キリエの旋律で歌います。第9曲から続いてきたジュスマイヤーの補作がここでモーツァルトの原作に立ち戻り、モーツァルトの作品として締めくくられます。

畑儀文先生を指揮者にお迎えして11年目の今年、かねてからの念願であったモーツァルトの「レクイエム」を歌う機会を得ました。能登の震災やウクライナ、中東紛争の被害者の方々へ思いを寄せ、ご来聴の皆様へのご発展を祈念しつつ、ソリスト、オーケストラの皆さまと力を合わせ精一杯歌わせていただきます。

(参考文献)

- モーツァルトへの旅 小塩 節
 - モーツァルト考 池内 紀
 - モーツァルト最後の年 H・G・ロビンズ・ランドン ほか
- (テナー 福田 伸)

Profile

指揮

畑 儀文 はた よしふみ



兵庫県丹波篠山市生まれ。大阪音楽大学大学院修了。

1979年大阪にて、小林道夫氏の伴奏による初リサイタルを行う。以後テノールソリストとして、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団ホルン奏者ペーター・ダム氏との共演、イエルク・デームス氏の伴奏による数多くのリサイタル等で大きな成果をおさめた。

1991年オランダ・アムステルダムにおいて、バロック歌手として高名なマックス・ファン・エグモント氏のもとで研鑽を積む。以後オランダ各地において、受難週には、エヴァンゲリストとして招かれ、近年はドイツ・ライプツィヒにおいてバッハ作品のソロを務める。

また1993年～1999年にかけて、シューベルト歌曲全曲演奏を成し遂げ、国内外で話題を集めた。2017年3月大阪バッハ合唱団オランダ、ドイツツアーでは「マタイ受難曲」の指揮者、エヴァンゲリストとして演奏会を成功に導いた。

2024年5月ドイツの音楽祭「Eckelshausener Musiktage」で、8月ウィーンのLichtentalkirche（シューベルト教会）の「Sommerkonzert」で「美しき水車屋の娘」を弾き歌う。

日本コロムビアからCD「日本のうた」「新しい日本のうた」「トスティ歌曲集」「昭和のうた」「美しき水車小屋の娘」、エール株式会社から「こどものこころ」「日本のこころ」をリリースし、その天性の歌声はジャンルを問わず心に響く感動を呼び、注目を集めている。

「大阪文化祭本賞」「咲くやこの花賞」「大阪府民劇場賞」「坂井時忠音楽賞」「兵庫県芸術奨励賞」「兵庫県文化賞」等多数の賞を受賞。

丹波の森国際音楽祭シューベルトティアードたんば音楽監督。京都女子大学非常勤講師。

指揮者 畑儀文氏に一问一答

問

2013年秋よりご指導いただいておりますが、指揮者のオファーをお引き受けいただいた理由をお聞かせください。また宝塚混声合唱団は成長していますか？



ソプラノのHさんからある日の朝、お電話をいただきました。10年も経つのに、はっきり覚えています。声を掛けていただき、ヤッター、と声をあげそうになりました。以後、毎週通った阪急逆瀬川の旧中央公民館での練習も思い出深いです。もちろん最初は戸惑いました。でも演奏上の問題点の多くが、指導者である私に責任があると気づき、じっくり共に歩もうと決意しました。テノール歌手として感じてきたクラシック声楽曲の歌唱の難しさと奥深さを、合唱団の皆さんと共有することにしたのです。自身の歌唱については今もなお悩んでいるので、宝塚混声合唱団のクオリティーについての評価は、聴衆の皆さんに委ねたいと思います。それは歌手・指揮者としての私への評価とも受け止めます。

問

今回とりあげる作曲家は聴けばIQが上がるというモーツァルトですが、宝塚混声合唱団がつくる「レクイエム」「雀のミサ」でここをお聴きいただければというポイントを教えてください。また昨年、シューベルトは漢字一文字で表すと「優」、バッハは「整」、ハイドンは「活」と述べられていましたが、モーツァルトは？



天地創造は神によってなされた、ということですが、音楽も神からの贈り物？と思ってしまう。正に芸術の神・ミューズの子のような神童モーツァルトから生まれた響きには神性を感じます。レクイエムとミサを天国的な美しさに近づけたい、と思っています。モーツァルトは漢字一文字で「翔」。

問

音楽家としてご自身が愛してやまない曲やライフワーク、またリラックス方法について教えてください。



シューベルトの全作品をこよなく愛しています。コロナ禍から始めた「冬の旅」全24曲と「美しき水車屋の娘」全20曲の弾き歌い、今は交互に弾き歌うことが日課となっています。こんな私へのシューベルトからのプレゼントでしょうか、本年5月ドイツの音楽祭「Eckelshausener Musiktage」で、8月ウィーンのLichtentalkirche（シューベルト教会）の「Sommerkonzert」で「美しき水車屋の娘」を弾き歌います。私の郷里・丹波での国際音楽祭「シューベルトティアードたんば」は今年30年目を迎えます。19歳のシューベルトが、モーツァルトの弦楽五重奏ト短調K516を聴いて、日記に書き記しています。「あの魔法のような音色が、まだ耳の中に鳴り響いている・・・僕らの日々の生活に限りない恩恵を与え続けるだろう・・・」と。練習の合間や電車の中で料理レシピのYouTubeを見ます。演奏と料理は共通点があります。時間のある時は寄席に通っています。今年の目標は100人の落語家を聴くこと。

Profile

ソプラノ

松原 みなみ まつばら みなみ



大阪府出身。東京藝術大学音楽学部声楽科、同大学大学院音楽研究科修士課程(独唱)、博士後期課程(独唱)修了。博士号(音楽)を取得。三菱地所賞受賞。ウィーン国立音楽大学オペラ科を審査員満場一致の首席(最優秀)で修了。

現在東京藝術大学音楽学部声楽科教育研究助手。明治安田クオリティオブライフ文化財団海外音楽研修生。第22回友愛ドイツ歌曲コンクール奨励賞受賞(学生の部最高位)。

第24回友愛ドイツ歌曲コンクール一般の部第二位ならびに、日本歌曲賞受賞。Jan Kiepura国際声楽コンクールR.シュトラウス賞受賞。Ljuba Welitsch国際声楽コンクール特別賞受賞。第26回コンセル・マロニエ21第三位。第91回日本音楽コンクール声楽部門(歌曲)第一位、ならびに木下賞、畑中賞、E.ナカミチ賞受賞。

コンサートソリストやオペラの舞台で活躍の場を広げている。

アルト

福嶋 あかね ふくしま あかね



兵庫県尼崎市生まれ。滋賀県立石山高等学校音楽科卒業。京都市立芸術大学卒業。京都市立芸術大学大学院修士課程首席修了。大学院賞受賞。

2000年びわ湖ホールにてヘンデル『メサイア』アルトソロでデビュー。以後、様々な舞台や演奏会にソリストとして出演を重ねるほか、神戸市混声合唱団、ヴォーカルアンサンブルKyotoにも所属。2012年度バロックザール賞受賞。現在はフリー。

合唱指揮および合唱指導にも注力し、近年に携わってきた団体として、三田楽友混声合唱団、宝塚混声合唱団、同志社学生混声合唱団創立75周年記念コンサート、京都市少年合唱団、しがぎん経済文化センター(KEIBUN)第九合唱団、滋賀県立膳所高等学校合唱部、草津カンタービレなどが挙げられる。

滋賀県立石山高等学校音楽科講師、京都女子大学講師。

テノール

松原 友 まつばらとも



photo:Yoshinobu Fukaya

東京藝術大学卒業。同大学院修了。ロームミュージックファンデーション、野村財団奨学生としてミュンヘン音楽大学大学院、ウィーン国立音楽大学リート・オラトリオ科卒業。第51回全国学生音楽コンクール第1位、第14回日仏声楽コンクール第3位、第14回松方ホール音楽賞、第81回、83回日本音楽コンクール第3位・岩谷賞（聴衆賞）、第71回文化庁芸術祭新人賞受賞。

これまで日本、ヨーロッパにおいてリサイタルを開催し、NHKリサイタルノヴァ、ルールトリエンナーレ、トビリシ音楽祭、小澤征爾音楽塾、サイトウキネンフェスティバル、フェニックスホール・レヴオリュションシリーズ、PMF音楽祭に出演。小澤征爾、ウルフ・シルマー、準・メルクル、インゴ・メッツマッハー、ハルトムート・ヘンヒェン、上岡敏之、山田和樹他、国際的な指揮者と共演を重ねる。

東京藝術大学、京都市立芸術大学、武蔵野音楽大学、同志社女子大学、相愛大学、大阪音楽大学、大阪教育大学、夕陽丘高校、相愛高校各非常勤講師。東京二期会、日本演奏連盟、日本シューベルト協会各会員。ALM・コジマ録音よりCD「シューベルト歌曲集」発売。シューベルト歌曲連続演奏会~Der Weg zum 2028~を開催中。

<https://tomo-matsubara-musik.com>

バス

篠部 信宏 しへののぶひろ



大阪芸術大学大学院修了。卒業時に学長賞受賞。第1回大阪国際音楽コンクール声楽部門第3位受賞。

2009年丹波の森国際音楽祭のシンボルアーティスト。2005年より毎年渡欧Max van Egmond氏に師事。2017年3月オランダにてバッハ「マタイ受難曲」のイエスを、ドイツにて同曲のバスアリアを歌いバーディッシュ新聞紙上で絶賛される。

2019年11月ドイツ、アイゼナハバッハ音楽祭にて「短調ミサ」のソロを務めた。宗教曲のソリストとして日本テレマン協会定期、大阪フィルハーモニー交響楽団いずみホール特別公演、関西フィルハーモニー管弦楽団定期等に出演。バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「短調ミサ」「クリスマスオラトリオ」全てのバスソロカンタータを含む「教会カンタータ」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト、フォーレ、ブラームスの各「レクイエム」、ベートーヴェン「第九」「荘厳ミサ」他多数の作品を歌い高い評価を得ている。

現在、シノベムジカアカデミー代表、京都バッハソリスト所属、京都ゲヴァントハウス合唱団音楽顧問、日本テレマン協会ソリスト、京都女子大学、大阪芸術大学非常勤講師。

チェロ

上塚 憲一 かみづか けんいち

京都市立芸術大学卒業。チェロを黒沼俊夫、A.ビルスマ、室内楽をG. ボッセ、S. スタンデイジの各氏に師事。

大阪文化祭奨励賞、灘ライオンズクラブ賞、坂井時忠音楽賞を受賞。

大阪音楽大学教授、同大学付属音楽院講師、西宮高等学校音楽科非常勤講師。チェロ・アンサンブル・エクラ、Baroque Ensemble VOC、アンサンブル・ムジカ・アニマを主宰。ソロ活動のほか、室内楽では播磨室内合奏団(2015年結成)に参加し、自身でも旧テレマン・アンサンブルメンバーの再活動の場としてザ・リターンズ・コンソートを結成した。指揮活動としては、ジョワン(オーケストラ・クラシック・ド・ジョワン/アンサンブル・ジョワン)、チェロ・アンサンブルKobe、アンサンブル・オルタンシア・神戸の音楽監督や指揮者として活動し、地域の活動として明石フィルハーモニー管弦楽団演奏委員、同管弦楽団運営副本部長、同ジュニア・オーケストラ常任トレーナーとして活動している。西宮音楽協会会員。

バイオリン

釋 伸司 しゃくしんじ

京都市立芸術大学卒業。元テレマン室内管弦楽団コンサートマスター。現在は、いずみシンフォニエッタ大阪、マイハート弦楽四重奏団メンバー。京都フィルハーモニー室内合奏団客演コンサートマスター。室内アンサンブル・アッサンブラージュを主宰し、ホール主催公演、学校公演、レコーディングなど幅広く活躍している。神戸女学院非常勤講師、岡山フィル首席奏者。アンサンブル・ムジカ・アニマコンサートマスター。

オーケストラ

アンサンブル・ムジカ・アニマ

2006年上塚憲一を中心に発足したオーケストラで、主に関西で活躍する経験と実力豊かな演奏家を中心に構成される。個々の演奏家のレベルの高さから、時代考証に基づいた正統派の演奏を目指す完成度の高いオーケストラで、バロックから近代の合唱作品での演奏は共演した各方面より高い評価を得ている。

宝塚混声合唱団とは、2007年の第19回音楽会以来、共演を務めさせていただいている。



モーツァルトの生家 (ザルツブルク)
W.A. モーツァルトは1756年にこの館の4階で生まれた。現在は記念館として彼のゆかりの品々が展示されている。



ホーエンザルツブルク城
ザルツブルクの街を見下ろす山の上に建つ城塞。11世紀後半に建設。父レオポルトはドイツ・アウグスブルク出身の音楽家で、ザルツブルクの宮廷音楽家であった。



モーツァルトの母の生家 (ザンクト・ギルゲン)
ザルツブルク郊外ウォルフガング湖畔の町。母アンナが生まれた家は今はモーツァルト記念館として公開されている。彼の姉ナンネルは結婚後この家に居を構えた。

モーツァルト写真館

バス・大隅氏による9回目の写真館です。モーツァルト25歳までのザルツブルク、その後35歳までのウィーン、ゆかりのプラハなどをお楽しみください。(音楽会運営部)



聖シュテファン大聖堂 (ウィーン)
ウィーンのシンボルといえる大聖堂。彼はここで1782年(26歳の時)に「後宮からの誘拐」でデビュー、同年コンスタンツェと結婚式を挙げた。そして9年後の1791年に彼の葬儀が行われたのもこの聖堂であった。



シェーンブルン宮殿 (ウィーン)
ハプスブルク家の夏の離宮。彼が6歳の時の演奏旅行の際、女帝マリア・テレジアの前で御前演奏を行った。この神童と同年のマリー・アントワネットとの出会いもこの時であった。



スタヴォフスケー劇場 (プラハ)
1783年完成。1787年(31歳の時)に「ドン・ジョヴァニ」がこの劇場で初演。



プラハ城遠景
1786年(30歳の時)に作曲の「フィガロの結婚」はプラハで大人気に。翌年には交響曲第38番「プラハ」を作曲。



中央墓地 (ウィーン)
彼は「レクイエム」が未完のまま1791年に35歳で亡くなった。遺体は聖マルクス共同墓地に葬られた後、後年墓碑が中央墓地に移された。中央がモーツァルト、右奥がシューベルト、左奥がベートーヴェンの墓。



モーツァルトが住んだ家 (ザルツブルク)

彼が1773～80年(17～24歳の時)に住んだ家。この間、マンハイムやパリ旅行なども経験する一方で、大司教宮廷音楽家として、教会音楽や世俗音楽を200曲ほど作曲。「雀のミサ」もこの時期(1775年)に作曲。



祝祭大劇場 (ザルツブルク)

ザルツブルク音楽祭の中心会場。市内にはこの他にミラベル宮殿、モーツァルトテウム(音楽研究教育機関)、州立劇場の他、名指揮者カラヤンの生家もある。



モーツァルト・ハウス (ウィーン)

彼が1784～87年(28～31歳の時)に住んだ家。現在は記念館として公開されている。ハイドンやベートーヴェンとの交流があったのもこの家。「フィガロの結婚」がここで作曲されたことから、以前は「フィガロハウス」と呼ばれていた。



カフェ・フラウエンフーバー (ウィーン)

ウィーン最古のカフェ。ここで、モーツァルトやベートーヴェンも演奏会を開いたという。



モーツァルト最後の家 (ウィーン)

彼が晩年の1790～91年(34～35歳の時)を過ごした家。「魔笛」、未完の「レクイエム」はここで書かれた。今は普通の店舗で、記念プレートだけが当時を偲ぼせる。



サリエリの家 (ウィーン)

モーツァルトの成功を妬む人も多く、サリエリもその1人といわれている。映画「アマデウス」でも有名になったサリエリの家は、モーツァルトの家のすぐ近くにあった。



ウィーンの土産物屋

モーツァルトはウィーンの街中で溢れています。写真は市中央にある土産物屋。

ウィーンの広告柱

街中のあちこちにあるリトファスゾイレ(広告柱)。